

知求会ニュース

2014年12月

第52号

◎ 9月入試合格結果

国際社会研究専攻 一般 1名・社会人 1名・外国人 1名 計3名
国際文化研究専攻 一般 2名・社会人 0名・外国人 4名 計6名
国際交流研究専攻 一般 1名・社会人 1名・外国人 5名・
国際交流・国際貢献活動経験者 0名 計7名 合計16名

◎ 平成26年度第1回各学部等同窓会連絡協議会報告

2014(平成25)年9月12日(金)午後4時から、宇都宮大学UUプラザ(2階)コミュニティフロアにて、平成26年度第1回各学部等同窓会連絡協議会が開催されました。出席者は進村武男 学長・石田朋靖 理事・井本英夫 理事・加藤幹彦 理事・田卷松雄 国際学部長・藤井佐知子 教育学部長(代理:酒井一博)・石井清 工学研究科長・杉田昭栄 農学部長の大学側8名と事務局担当者4名、吉葉恭行 国際学部同窓会長・土屋伸夫 国際学研究所同窓会長・柴田毅 教育学部同窓会会長・松本展壽 同副会長・小林哲夫 同副会長・阿久津嘉子 同事務局長・上澤和彦 工学部同窓会副会長・和賀井睦夫 農学部峰ヶ丘同窓会会長の同窓会側8名でした。議事内容は、協議事項として、特になし。検討事項として、1. 各学部同窓会の活動報告等について、2. 大学に対する要望等について、3. その他、そして大学の現状報告等がなされました。

◎ 掲載記事紹介

1. 読売新聞 朝刊(平成26年4月18日発行)33面に、「宇大・読売共催講座 情報を読み解く力を養う 全5回、来月24日から」と題して、「第1回5月24日 “国際報道の重層性、を読み解く”」の内容で、[清水奈名子](#)先生の記事が掲載されました。
2. 下野新聞 朝刊(平成26年5月19日発行)20面に、「宇大生、鉍毒の歴史学ぶ」と題して、「栃木 旧谷中村跡など見学 足尾町では植樹活動も」の内容で、[高際澄雄](#)先生の記事が掲載されました。
3. 読売新聞 朝刊(平成26年5月25日発行)24面に、「宇大・読売共催講座 国際報道での日本考察 清水准教授 戦争の愚かさ訴え」と題して、[清水奈名子](#)先生の記事が掲載されました。
4. 朝日新聞 朝刊(平成26年6月12日発行)29面に、「中学教科単語帳 フィリピン語登場 県内全小中校に配布「多くの子に役だつて」」と題して、HANDSプロジェクト代表[田卷松雄](#)先生の記事が掲載されました。

5. 下野新聞 朝刊 (平成 26 年 8 月 28 日発行) 11 面に、「外国人留学生 県内企業への就職増加」と題して、「海外展開、支援策後押し」の内容で、**郭 暁光**さん(国際文化研究専攻・12 期生)の記事が掲載されました。
6. 日本経済新聞 朝刊 (平成 26 年 9 月 3 日発行) 31 面に、「人口減 危機を越えろ ㊦」コーナーで、「広域連携、実結ぶか 地域力低下の影響抑える」と題した記事の中で、**中村祐司**先生のコメントが掲載されました。
7. 日本経済新聞 朝刊 (平成 26 年 9 月 20 日発行) 39 面に、「最終処分場阻止へ条例施行 塩谷町、反対姿勢鮮明に 効力未知数 政治決着は不透明」の記事の中で、**中村祐司**先生のコメントが掲載されました。

◎ 国際学部だより

1. UU now35 号 (平成 26 年 11 月 20 日発行) 1・2 面に、「特集 Vol.1 国際学部 20 周年」と題して、**田巻松雄**先生、**田口卓臣**先生と**吉葉恭行**国際学部同窓会会長(国際社会学科・第 1 期生)の記事が掲載されました。<http://www.utsunomiya-u.ac.jp/info/uunow/35/2-3.pdf>
2. UU now35 号 (平成 26 年 11 月 20 日発行) 8 面に、「Welcome to 授業」コーナーで、国際学部国際文化学科イギリス文化論について、**出羽 尚**先生、**鈴木康大**さん(国際文化学科・3 年生)と**橋本絵里**さん(国際文化学科・4 年生)のコメントが掲載されました。<http://www.utsunomiya-u.ac.jp/info/uunow/35/8-9.pdf>
3. UU now35 号 (平成 26 年 11 月 20 日発行) 14 面に、「Utsunomiya University News」コーナーで、第 11 回「宇都宮大学ベストレクチャー賞」受賞者が決定！の記事に国際学部専門教育科目分野において、**アンドリュー ニール ライマン**先生、基盤教育科目分野において、**梅木由美子**先生が受賞されました。<http://www.utsunomiya-u.ac.jp/info/uunow/35/14-15.pdf>
4. まちびあ No.11 秋号 (平成 26 年 10 月 1 日発行) 2・3 面に、「大学生による社会貢献活動 人づくりから始まる、将来のまちづくり。」の題で、**高田光紀**さん(国際学部・2 年生)と**岩井俊宗**さん(国際社会学科・第 7 期生)の記事が掲載されました。
5. アサヒカメラ 2015 年 1 月増大号 (平成 26 年 12 月 19 日発売) 91・98-99 頁に、「2015 年・注目の写真家たち」のコーナーで、**小原一真**さん(国際社会学科・第 10 期生)の記事が掲載されました。
6. 下野新聞 朝刊 (平成 26 年 4 月 10 日発行) 25 面に、「学生に議論、学習の場 宇大「コモンズ」オープン」と題した記事の中で、**鈴木 京**さん (国際学部 1 年) のコメントが掲載されました。
7. 下野新聞 朝刊 (平成 26 年 6 月 26 日発行) 3 面に、「朝の列島 包むため息 結果残念でも「いい思い出」と題して、**西川明子**さん (国際学部 4 年) の記事が掲載されました。

8. 下野新聞 朝刊 (平成 26 年 8 月 2 日発行) 4 面に、「宇大生インターンシップ 企業課題見つけ解決へ」と題して、**岩井俊宗**さん(国際社会学科・第 7 期生)と**佐藤拓弥**さん (国際学部 3 年) の記事が掲載されました。
9. とちぎ朝日(平成 26 年 12 月 5 日発行) 3 面に、「韓国人 2 選手 宇大生と交流 栃木 SC」と題して、**秋野功作**さん (国際学部 3 年) と**海津未樹**さん (国際学部 2 年) のコメントが掲載されました。
10. 2014 年 11 月 29・30 日に行われた放送大学栃木学習センター面接授業「韓国語と韓国現代事情」の講師に、山梨英和大学准教授の**李 尚珍**さん (国際文化学科および国際文化研究専攻 第 1 期生) が務めました。
11. 2014 年 12 月 11 日に開催された国際学部附属多文化公共圏センター主催の第 6 回グローバル教育セミナーにおいて、認定 NPO 法人 ACE (エース) 子ども支援事業担当の**成田由香子**さん(国際社会学科・第 2 期生)が基調講演「私たちの暮らしかた考える児童労働と子どもの貧困」を務めました。

○刊行案内

国際学部創立20周年記念として『国際学部20年・国際学研究科15年の歩み』(平成26年10月31日発行)が刊行されました。本文69頁で、目次構成の主なものは以下の通りです。

はじめに

I 部 国際学部・国際学研究科の歩み

II 部 特色あるプロジェクトと学生活動

III 部 メッセージ

編集後記

なお、国際学部ホームページで近日中に見られるようになります。

(<http://www.kokusai.utsunomiya-u.ac.jp/>)

* 『HANDS next—とちぎ多文化共生教育通信』のお知らせ

2007 年 9 月 20 日に、ニュースレター『HANDS』第 1 号が発行されました。2010 年度より宇都宮大学特定重点推進研究グループ通信『HANDS』がリニューアルされ、『HANDS next』として再出発することになりました。

第 17 号(2014 年 9 月 1 日)

巻頭言・進路保障・科研・国際学叢書

国際学部長 HANDS プロジェクト代表 **田巻松雄**

ごあいさつ

国際学部講師 **立花有希**

「外国人児童生徒教育推進協議会」報告

国際学部長 HANDS プロジェクト代表 **田巻松雄**

2014 年度子ども国際理解サマースクール

HANDS プロジェクトコーディネーター **船山千恵**

第 1 回外国人児童生徒支援会議報告

HANDS プロジェクトコーディネーター **船山千恵**

学生ボランティア派遣報告

国際学部特任准教授 **若林秀樹**

進め日本語教室第 7 回 にほんご教室 1 年生

宇都宮市立清原中央小学校 **小池美佐子**

事務局便り

①「多言語による高校進学ガイダンス」

②『中学教科単語帳』

③「外国につながる子どもフォーラム 2014」

第 18 号(2014 年 11 月 13 日)

「ガイダンス」「第 2 回協議会」報告

国際学部長 HANDS プロジェクト代表 **田巻松雄**

本学における「多言語による高校進学ガイダンス」(2014. 10. 26) 体験談発表より

「今までの自分、これからの自分～夢は努力次第」

工学院大学大学院博士後期課程 1 年 **新垣 一**

アンケートより参加者からの感想

参加者の状況

本学における「多言語による高校進学ガイダンス」関係者及び協力者一覧

多言語による高校進学ガイダンス(地域開催)のまとめ

真岡市における「多言語による高校進学ガイダンス」を開催して

真岡市教育委員会学校教育課副主幹兼指導主事 **櫻井明彦**

大田原市における「多言語による高校進学ガイダンス」(2014. 9. 26) 体験談発表より

「頑張るきっかけ」

国際学部 1 年 **小野寺まゆみ**

グローバルサマーツアー 2014

国際学部 3 年 **新屋ジェゴ明夫**

グローバルサマーツアー 2014 ① コレージオ・ピタゴラス太田校

国際学部 4 年 **周菅夏美**

グローバルサマーツアー 2014 ② みよし保育園

国際学部 4 年 **村里杏子**

グローバルサマーツアー2014 ③坂田保育園

教育学部 4年 長尾真弥

グローバルサマーツアー2014 ④大泉西保育園

作新学院大学経営学部 1年 行本大誠

進め日本語教室 第8回 ―日本語教室担当半年の学びからのちょっとした工夫―

小山市立小山城東小学校 伊藤佳之

外国人児童生徒への夏休み学習支援報告

～真岡市国際交流協会スペイン語教室 「AMAUTA」への支援を終えて～

国際学部 3年 五十嵐 茜

シリーズ；学生ボランティア派遣体験記 14

夢をもつことへの支援の確かな実感

国際学部 4年 金子彩香

宇都宮市「かがやきルーム」のこと、私立長門高等学校就学科のこと

教育学部准教授 丸山剛史

事務局だより

―HANDS プロジェクトからのお知らせ―

「外国につながる子どもフォーラム 2014」の開催

研究室訪問 43 第9号から国際学研究科に関係する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。今回は予定の執筆者の辞退によりお休みになります。

博士録 28 第22号から今後の博士誕生を鑑み、新コーナーを設けました。第28回目には市川研究室 OG の人見千佐子さんをお願いしました。

「博士論文を書き終えて」

人見 千佐子

皆さん、こんにちは。国際学研究科 OG の人見千佐子です。この春法政大学国際日本学インスティテュートにおいて私は博士論文として「イーハトーヴ世界の創造 ―宮沢賢治の体感した空間―」を完成させ、博士号（学術）をお認めいただきました。このコーナーをご覧になっているのは、博士論文（あるいは修士論文）をまとめている途中にある方も多いことでしょう。今回は私が苦労した点や解決策等をご紹介する中で、何かヒントがあれば嬉しく思います。

論文作成過程での問題点とその解決法

(1) テーマの選定

私の場合、論文の構成を考え始めた時に書きたい素材は多かったのですが、素材ごとに共通性がなくばらばらの状態で、最終的に一つにまとまるのか本当に不安でした。解決策として、とにかく素材ごとに短期間でまとまった文章を完成させ、次々に投稿論文として手離していく、という方法をとりました。これには、まずは論文の一部となるものが完成に近い形として残ること、早いうちに多くの批評をいただくことによって早めの軌道修正が行えるという利点がありました。提出前の何カ月かは、博士論文の体裁を整えることに時間を費やさねばならなくなりますが、投稿論文でここまで済ませている分、かなり時間を節約できたように思います。これをいくつか繰り返していくうちに、自分の中で次第に一つの共通性を見出せるようになりました。具体的には空間という考え方です。当初は思いつきもしませんでした。時間をかけて様々な方向から論文を考えることにより、このことに気づけたのだと思います。

(2) 図書館利用

先行研究の入手法については、非常にわずらわしい側面があります。皆さんも同様と思いますが、図書館なら所属大学はもちろんのこと、国会図書館も利用しました。また、「山手コンソーシアム」というシステムがあったことは非常に助かりました。これは登録している大学同士の学生であれば、入館する際の簡易な手続きのみで利用できるというものです。私の場合は青山学院大学の図書館によくお世話になりました。大学ごとに得意分野も違いますので、一つ見つかるると他の貴重な書籍も見つかる確率が高いように思います。回数が多ければ、特別にカードを発行していただく事が出来て便利です。効率的に静かな環境で研究を進めることができました。また、書店での品ぞろえは図書館と違った意味で参考になりました。研究書、専門書は少なくとも、一般書として現在受け入れられているものには、やはり魅力とその理由があります。例えば宮澤賢治のどの作品が人気なのか、どのような研究や考え方が影響力を持っているのか、そのトレンドを見極めることも研究者として必要と思っております。

(3) 論文を書く意味

文化系の論文は常に、この論文を今なぜ書かねばならないのか、という難問が立ちまわっています。ひいてはそれが論文の最大の魅力にもなりうるのですが、言うほど簡単でもありません。私は新しいことはあまり思いつきませんでしたので、まずは興味ある分野において、先行研究の裏を取るという作業から始めました。結論からいえば、既に当たり前とされている事柄であっても、実はそうではなかったこともある、ということです。博物館で学芸員の方と話しながら、そのことに気付いたこともありますし、資料を一つ一つ突き合わせていった結果分かる時もありました。もしそのようなお宝に突き当たれば、明らかにするだけでも価値ある論文となります。それに自分の分析を加えることにより、唯一無二の論文に成長させることも可能です。基本的な作業を省略せずコツコツと積み上げ

ることで、この論文を書く意味は見出せると思います。

以上、駆け足で私の経験をお話させていただきましたが、何か良いヒントは見つかったでしょうか。2013年度から博士論文の全文デジタル公開が始まっておりますので、ご興味のある方はぜひ、と言いたい所なのですが、実は私の論文は要約だけの公表の予定です。というのもこの論文を刊行することになり、ただ今作業中なのです。全文は書籍でのお披露目ということになるかと思っておりますので、しばしお待ちいただきたいと思っております。準備ができましたら、また詳しいことを知求会ニュースでお知らせさせていただきます。年度内の刊行予定です。

最後に要旨を載せておきます。お時間のある方はどうぞご覧ください。

博士論文「イーハトーヴ世界の創造 ―宮沢賢治の体感した空間―」 要旨

宮沢賢治(みやざわ・けんじ、1896―1933年、以下賢治)はイーハトーヴという独特な世界を構築した。それは日本とも外国とも区別のつかない場所、それ以前に国境など存在しないかのような民族と文化の混在する場所である。本論文は主に東京、浮世絵、ユートピア、エスペラント語、四次元の五つの視点からイーハトーヴの成り立ちにせまり、いかに賢治がこの世界を創造するに至ったかを明らかにするものである。

第1章 賢治のみつめた東京

賢治の体感した空間として、東京の役割を分析することは重要である。東京で賢治が吸収したもの、その一つに明治以降急激に流入し始めた西欧文化がある。憧れつつも海外渡航の経験のない賢治は、東京を通してヨーロッパやアメリカを見つめていた。

花巻に生まれた賢治は、宮澤マキの一員として注目を浴び続けてきた少年時代までの自分の立ち位置、アイデンティティといったものを、東京に来て初めて外側からの目により認識しえた。花巻での重苦しい地縁、血縁から解き放たれたという一時的な感覚は賢治を十分に高揚させ、都会に出たばかりの若者にありがちなアイデンティティの変換の欲望を促していったであろう。新しい文化や思想を取り入れるなら西欧のものであるという時代、それが海外渡航への原動力となった同時代の人々と賢治との決定的な違いは、東京をみつめた向こうに見える西欧の見え方であり、童話の市場として世界全体を狙ったエスペラント学習であり、一時的にでも花巻から離れ、地縁から解放されたいという強い願いであったのだ。

しかし憧れていた東京もいつしかその本質が目につくようになる。東京の向こうに見える世界もまた近代文明の行き詰りという半面が見えてくると、相対的に故郷花巻を違った形で映し出していく。東京という都市の空間と、花巻という農村の空間、その二つが新たな価値観で賢治の目に映る時こそが、もう一つの空間であるイーハトーヴ世界の構築の第一歩なのであった。

第2章 賢治と浮世絵

浮世絵の世界を一つの創造世界と捉えたと、時をこえ、海を越え、その価値が再発見された過程はイーハトーヴ創造にも大きく影響した。賢治が浮世絵において特に着目したのは、非現実という世界を構築する一方で、生き物のように呼吸し、変化し続ける浮世絵作品のリアルさでもあった。また一瞬を捉えた刹那の浮世絵に、連続した場面や音、空気の動きを感じ、賢治はそこに現実世界との交感を見出していった。

東京に対しての態度同様、自分の存在するところに欲する空間を引き寄せ、外国の見方をも意識せずとも取り入れる、その方法は図らずもイーハトーヴを構築する一つの枠組みへとになっていった。賢治の中では実際に見聞きしたものと、書物等から得た知識とは区別なく同じレベルで存在するかのようである。頭に思い浮かべたことがそのまま現実である、という特有の考え方は、海外に対する眼差しとも、イーハトーヴを構築する方法とも共通する。さらに賢治は浮世絵に対して、生活に結びつく芸術という視点を持っていた。これは日本国内だけへの視線では気づくことのできないものであり、西洋の収集家たちが魅せられた浮世絵の単純化や神秘とも通じるものである。それはやがてアーツ・アンド・クラフツ運動やトルストイの芸術への考え方なども含めて化学反応を起こし、賢治の羅須地人協会の設立目的とつながっていくのである。

第3章 イーハトーヴとユートピア

賢治のイーハトーヴの世界及び羅須地人協会は、トルストイの農地解放、イワン王国、モリスのユートピア、アーツ・アンド・クラフツ運動、と比較すると次の三点にまとめることができる。

①ユートピア思想の欠如

モリス (William Morris, 1834 - 1896年)、トルストイ (Lev Nikolayevich Tolstoy, 1828 - 1910年) の創造世界と賢治のイーハトーヴが決定的に違っているのは、理想を純化させた世界ではない、ということである。そこにユートピア世界を描くことは可能だったかもしれないが、賢治はあえてそうしなかった。農民の生活を同じ目線で理解するということは、実践という責任をもって未来をつくる手段が必要であった。賢治は農民に寄り添い共に生きる視点で、問題点も含めユートピアには描かれない細部を丁寧に表していった。

②都会と田園の認識の差異

ユートピアにおいて人は都会から田園へと移動し、都会のルールを持ち込んだ。賢治の羅須地人協会においては、あくまでも土着の人々を対象にしており、賢治自身も土地の出身者である。都市の人々が農村を都市化するのではなく、農村に根差した無理のない方法で、人々に寄り添いながら、都市の持つ利点を取り入れて行く方法をとった。それは農民たちが自ら学び合い、変化していく道であったのだ。

③商業と貨幣への認識の差異

イワン王国やモリスのユートピアにおいて貨幣は本来の意味を持たない。物々交換、自

給自足といった考えは、トルストイやモリスからの影響と考えられるが、賢治の羅須地人協会では次第に逆の方向へと傾いていく。農民が農作業の合間に創る製品を商品化し、貧窮に対する即効性への期待を前面に押し出すのである。『ポラーノの広場』の中で描かれた成功は、羅須地人会の具体的活動の目論みであった。イーハトーヴにも貨幣を獲得する手立ての道筋をつけることが必要であった。何より夢想世界イーハトーヴはどこにもない世界ではなく、今ある岩手が基盤にあることを大前提としていた。その意味で賢治は現実を見つめながら、理想の世界というよりも、人々の暮らしが楽になるような空間を作り出そうとしていた。

イーハトーヴは楽しく幸せなだけの空間ではない。農村部へと流れ込む近代文明は、様々な形で住人達の生活を脅かす。モリスは『ユートピアだより』において、嫌悪する近代文明の時代を既に過去のものとし、理想的世界の時代への過渡期をすでに終わった物として物語の中に畳みこんでしまった。一方賢治は、そのモリスが畳みこんだ部分を一つ一つ丁寧に描いていった。現実を書き遺す方法をとったのである。しかし賢治の作品においては単なる近代文明批判にとどまることはなく、むしろその向こうにある時間と思索に導かれるべき世界への移行に重点を置かれている。そこへたどり着くまでの道もやはり厳しく辛い。しかしその先を見る感覚は現代の我々の視点とも、もっと先の未来の人々の視点とも重なるものである。

第4章 イーハトーヴの言語と時空間

言語と時空間はイーハトーヴの成り立ちを考える時、一つの国の使用言語と地理を考えるのと同様に重要である。イーハトーヴで使用される言語は基本的に日本語で、標準語を中心としているが、岩手県地方の方言も含まれる。方言の使用は、都市と農村の問題も孕んだものであった。賢治はまた、童話をエスペラント語で発表することを目論んでいた。エスペラント語自体の持つ歴史がそうであるように、賢治は農村と都会の、そして日本と世界の間にある優劣関係の打破の可能性をそこに見出したのである。

イーハトーヴ世界における空間のイメージは賢治の追求した四次元の世界と深く関わっている。それは当時流行したアインシュタイン (Albert Einstein、1879-1955年) の相対性理論をはじめとする四次元の世界であり、時間の観念論であり、最終的には妹トシが行ってしまった死の世界である。通信することが許されないトシを思い、賢治は異空間をさまようが、その着地点としてある程度のまとまりを見せるのが、心象スケッチと呼んだ『春と修羅』に表されるような時間と空間の断片を積み重ねたモデルであった。賢治にとってその空間認識こそが最も自分の感覚に近いものであり、イーハトーヴ構築の際に共通する要素となっていた。

終章

常に悩み、苦しみを抱えながら生きていた賢治はただ苦しいと嘆くだけの人間ではなか

った。彼にとって生きることとは実践すること、変化し続けることであった。賢治がその短い生涯を通して求め続けたのは、もう一つの空間、もう一つの言語を含むもう一つの世界であった。イーハトーヴは岩手県である。しかしそのものではない。愛着ある郷土でありながら、岩手の現在（大正当時）を含み、その過去も、やがて来る未来も内包する大きな時間的広がりを持つ、岩手の永久的空間世界である。トシとの死別からはもう一つの空間をつくりだした。岩手地方の農民の困窮からは、もう一つの社会を考えだした。方言のもつ劣性からもう一つの言語の習得をのぞんだ。自分という変化する存在自体もまた新たに創り出され、それら全てがイーハトーヴという創造世界に摂りこまれていく。

このようにイーハトーヴとはこれらの過程、賢治の苦しみから実践、独特の時間・空間把握へと続く一切を詳細に書き記した結果構築された、もう一つの世界なのだ。煤色のユートピアではない、何かを真似して作り上げたものでもない、イーハトーヴという名のその時自分の心に浮かび、リアルなものとして認識した、大正から昭和にかけてのあの瞬間の事実には他ならない。心象スケッチと呼んだ賢治の世界観は、『春と修羅』の制作過程に確立し、『注文の多い料理店』編纂時に花開く。一つ一つの花びらのような作品達は、まとめあげられた時に大輪の花を咲かせると同時に、それまでばらばらに機能していた賢治の感覚的・直観的心象世界を構築していく。それこそがイーハトーヴの持つ本質といえるのだ。

(国際学研究科 国際文化研究専攻 第10期修了生)

(2014年4月30日原稿受理)

博士録 29 第22号から今後の博士誕生を鑑み、新コーナーを設けました。第29回目には高際研究室OBの菅野直和さんにお願ひしました。

Critical Early Warning: Reframing the Study and Practice of Conflict Early Warning

「批判的早期警報：紛争の早期警報の研究と実践を再構築する」

菅野 直和

研究内容

この研究は紛争予防の一環と考えられている「紛争の早期警報・介入」の研究及び実践の仕方を批判理論というレンズを通し精査し、再構築しようという試みである。まず初めに、同分野の研究者がとってきた問題解決型アプローチの問題点を指摘した。これまで同分野では研究の方向性は①紛争の発生を予期するための正確な指標を作りあげること、②いかに早期警報を早期介入に結び付けることができるか、という2点に集約されてきた。多くの研究者がこの分野に足を踏み入れた際、すでに何を研究すべきかが当たり前のように決定されており、誰もそれに対し問題を提起してこなかった。伝統的な早期警報の研究では、紛争発生に関するデータ収集・分析が行われ、それが西側諸国の政策決定者に伝達されるという構図が暗黙の了解として存在していた。そこでは、実

際に紛争の早期警報が必要な人々の視点が抜け落ちており、その背後には「西洋は平和の作り方を知っているがそのほかの途上国は知らない」、「したがって西側諸国が介入すべきである」というオリエンタリズム的な前提があると指摘した。

また同論文では、問題解決型アプローチでもう一つ問題なのは、紛争の早期警報と国際政治の関係を議論してこなかったことであると述べた。同論文では、フーコーの統治性を参考に、紛争の早期警報は、国際社会の民主的統治（コントロール）の道具であると述べた。フーコーによると、紛争の早期警報のように、データを収集し、記録をつけることは、人々を統治するために必要なテクニックである。紛争の早期警報もデータ収集・分析により、統治されるべき国家（無法国家あるいは非民主的国家）を見えやすくし、計算することができ、比較することができ、介入しうるものにするという、民主的統治の道具とみることができる。言い換えれば、紛争の早期警報は、西洋諸国の安全保障、経済的利益の拡大のための道具と見ることができる。さらに問題なのが、こうしたイデオロギーが、小規模な紛争や、現地住民の紛争の早期警報・介入のキャパシティを排除してきたことである。

したがって、同論文では、コミュニティベースの紛争の早期警報システムを、現地住民が主体的なアクターであることから、彼らを単なる西洋社会の救助の対象とみなす伝統的な紛争の早期警報よりも「解放的」な紛争の早期警報（Emancipatory Early Warning）の形であると仮定し、キルギスタンとスリランカのケーススタディを用い、どのような強みと弱みを持っているのか議論した。特にこういったコミュニティベースの紛争の早期警報の実践の場合次のような点を注意すべきであると指摘した。（１）政府自身が紛争の一因を作っている場合、コミュニティベースの紛争の早期警報は、暴力を予防し問題を目立たなくするため、政府に都合のよいように使用されうる。（２）コミュニティベースの紛争の早期警報を実践したい場合、暴力の予防に特化し、紛争の根本的な問題を解決しようとしないうほうが良い。というのも、多くの場合、政府が紛争の根本原因であり、それを解決しようとする、政府からの介入があり、実践が困難になる。（３）これらコミュニティベースの紛争の早期警報プロジェクトを支援する場合、ドナーは実施団体の構造や文化をしっかりと把握し、長期的な関係を結ぶこと、またこうした構造や文化が、紛争の早期警報プロジェクトにどのような影響を与えるか考慮する必要がある。

博士課程感想

博士課程をキングズ・カレッジ・ロンドンではじめる前に、スリランカ現地 NGO にて紛争の早期警報にかかる本を出版するプロジェクトにプロジェクトリーダー兼筆者として参加していたため、博士課程を始める際には、同分野の文献はほぼ読んでいたため、非常に役にたった。

キングズ・カレッジ・ロンドンでは、博士課程に登録するとまずは M.Phil (Master of Philosophy) 課程として登録され、コース開始から 18 か月以内に Mini Viva という面接試験を受け、正式な Ph.D (Doctor of Philosophy) のコースに昇格しなければならない。2 年目に入り、博士論文のテーマを変更したため、まったく内容の違うイントロダクションを書き始め、博士論文の進捗に若干が遅れが生じたが、なんとか MiniViva を突破し、晴れて本物の Ph.D 候補生になることができた。

また、研究において困難だった点は、ケーススタディで使用した二つのデータベースの紛争の早期警報システムはどちらも調査の時点ではプロジェクトが終了しており、同プロジェクトに携わっていた人物にコンタクトを取ったり、情報を収集するのが困難であったことである。特にキルギスタンのケースではロシア語での調査が必要であったため、通訳を通してのインタビューを行った。

さらに、博士論文に哲学的な深みを与えるために、哲学書を参照したが、それにかなりの時間を要した。しかし、最終的には、哲学的な深みもありつつ、実践に導入できるような提案もすることができた。

今後博士課程進学を考えている方には、研究機関、文献、国際会議が多く開催されるロンドンをぜひおすすめしたい。

(国際学部 国際社会学科 第 7 期卒業生)

(2014 年 12 月 08 日原稿受理)

知究人 24 第 9 号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー(ちきゅうびと)を設けました。今回は、今春卒業された丁研究室 OG の**眞宮晴日香**さんと渡邊直樹研究室 OB の**加藤ジオラデル**さんをお願いしました。

「一橋大学院所属研究科の紹介と研究内容」

一橋大学院言語社会研究科修士課程 1 年 **眞宮 晴日香**

学部時代は丁貴連研究室に所属し 2014(平成 26)年 3 月に宇都宮大学国際学部国際文化学科を卒業致しました。丁貴連教授は常に厳しくも温かいご指導をしてくださいました。現在は一橋大学院言語社会研究科において二つのゼミに所属しておりますが、丁先生が研究室で多くの学生を受け持ちながらも、一人一人のために妥協することなく熱心に向き合ってくれたことを思い返し、丁先生のご指導がどれほど手厚いものだったのか、今になりより強く実感しています。

現在私が所属する一橋大学院言語社会研究科は、第1部門（人文基礎）と第2部門（日本語教育学取得プログラム）に分かれており、私は第1部門に所属し、イ・ヨンスク教授、糟谷啓介教授にご指導して頂いています。第1部門は、社会言語系、思想・哲学・歴史系、欧米文化系・アジア文科系、芸術系など人文学の多様な分野をカバーし、多方向的な関心を育むことが重視されています。ゼミは複数所属可能で、他研究科のゼミに参加することもできるため、絶えず新鮮な学問的刺激を受けることが出来ます。私の所属するゼミにおいても、それぞれの研究分野は全く異なります。それによりあらゆる視点から意見を聞くこともできますが、逆に言えば、自身の専門領域の知識は自分自身で強化するしかありません。当然のことですが、これが研究室の仲間たちと切磋琢磨し励まし合い、共に研究を進めていく雰囲気であった学部時代とは異なる点です。研究とは孤独なものですが、一橋大学院生はマーキュリータワーという研究棟で、個人の研究机と本棚を所有し24時間オートロックで入室可能な研究室をもつこともできます。研究室は数人で共有するため、他の学生と共に研究に励もうという力になります。

また、先行研究を消化するためには一定の外国語能力が必要とされるため、外国語の文献演習という科目が設置されています。学部時代1年間韓国へ交換留学をした私は、朝鮮語文献演習を履修したのですが、ここで読む朝鮮語文献は非常に高度なものでした。そして韓国人学生や在日韓国人学生、中国系朝鮮族の学生と共に読む文献読解と韓国語での発表やディスカッションは、今後の研究のためにも非常に価値あるものでした。

「植民地朝鮮の日本語教育—『国語』としての日本語—」という研究テーマで卒業論文を執筆しましたが、所属研究科でのご指導とアドバイスを受け、現在は「植民地朝鮮人と日本語の本」という仮の研究テーマを設定し研究を進めています。どのようにして植民地朝鮮の人々が日常的に国語としての日本語で書かれた本に関心を抱き、日本書籍が植民地朝鮮で大衆的に享受されるようになっていったのかを分析しながら、日本という存在が今日の韓国社会に残した影を明らかにしていきたいと考えています。宇都宮大学での経験を糧に、残り1年間日々精進しながら修士論文を執筆していくつもりです。研究科紹介も致しましたが、少なからず私個人のバイアスがかかった文章であることを御承知ください。

（国際学部 国際文化学科 第16期卒業生）

（2014年12月07日原稿受理）

「大学院生活」

宇都宮大学大学院教育学研究科学校教育専攻 修士1年 加藤 ジョラन्दル

私が宇都宮大学教育学研究科学校教育専攻に進学した理由は、国際学部での学びを通して感じた人と人、人と自然の「わかりえなさ」を探求したいと考えたからです。どのよう

な過程を経て人は育っていくのか、人はどのように物事と関わりをもつようになるのか、という問いを考える必要がありました。

私の研究は、人間の文化的背景等に左右されない「人と人がわかりあうこと」を追究し、個人間・集団間の信念対立を克服する考え方と方法を明らかにする研究です。現代社会において危惧されることは、個人間・集団間の信念対立です。異なる背景をもつ者同士が限定された空間で共に生活を営むには、「ズレ（信念対立）」が生じてしまうことは否めません。信念対立を克服するための考え方と方法を明らかにすることが求められているのではないのでしょうか。

研究方法は、研究テーマの中核をなす「哲学対話」概念の理論的背景について諸文献の読解・検討です。また、宇都宮大学生や宇都宮市民の学び合い活動へのソクラティック・ダイアログの導入・検討です。ソクラティック・ダイアログとは、ドイツの哲学者レオナルド・ネルソン（1882-1927）が考案した哲学対話の実践です。「わかりえなさ」を超えるためには、人と人がそれぞれの背景と生き方をさらけ出し合い、生の多様性を自覚する場が必要だと考えます。そして、物事に対して「本当にこれでいいのだろうか」と共に探究する活動が日常生活のなかに必要です。哲学対話には、これらを実現する可能性があると信じています。不定期で「哲学カフェ MENON（メノン）」という活動を学内外で行っています。哲学対話に興味のある方がいらっしゃいましたら、ぜひお声をおかけください。ワークショップの情報をお知らせします。

人と人の「わかりえなさ」はどこからくるのか。地域において「哲学」とはどう理解され、哲学対話はどのような効果を生み出しているのか。効果的に機能しないなら、どうしてそうなのか。哲学対話が日常生活にどのような変化をもたらすのか。これらの疑問に答えを導き出す研究です。

話はかわりますが、宇都宮大学教育学研究科には内地留学で学びにきている現職教員の方々が多くいらっしゃいます。講義では現職教員の方々と同じ机に並び、熱く議論を交わしています。現場の生の声を聞きながら、学校教育の矛盾と葛藤について頭を悩ませる毎日です。最近、特に関心のある問題は、子どもの自殺についてです。子どもの非行や不登校、自殺は「特別な子」に起こるわけではないように思います。子どもたちはなにかに追い込まれて、仕方なくそうせざるをえないのでしょうか。一体なにが彼らを追いこんでいるのでしょうか。

（国際学部 国際文化学科 第16期卒業生）

（2014年12月08日原稿受理）

海外だより 19 第27号から国際学研究科、国際学部出身の海外在住者からの寄稿をお願いしたコーナーを設けました。今回は高橋優研究室OGの田巻綾那さんをお願いしました。

「ハンブルク派遣員生活」

田巻 綾那

2012(平成 24)年 3 月に国際学部国際社会学科を卒業しました、田巻綾那と申します。第 44 回の知究会ニュースでは、「知究人」のコーナーにて東京大学大学院人文社会系研究科での院生生活を紹介させて頂きました。その後、同大学院修士課程を修了し、現在はドイツのハンブルクにある在ハンブルク領事事務所で派遣員として働いています。今回はハンブルクでの私の派遣員生活について、ご紹介したいと思います。

私は「外務省在外公館派遣員制度」の試験を受け、3 年間の任期で 2014(平成 26)年 3 月にハンブルクへ派遣されました。修士論文の執筆に追われる一方での就職活動にどことなく違和感を覚える中、自身の研究対象であったドイツに関わる仕事、可能ならドイツ語を使える仕事をしたいと思い、「よし、受けるだけ受けてみよう！」と応募したら運よく通ってしまった、というのが正直なところです。余談ではありますが、「たぶん受からないだろう」と思い、修士論文提出後に同期の院生とドイツで打ち上げをしていた時に合格の連絡を頂きました。

「派遣員」は一言で言うと、語学力を生かして各在外公館での様々な業務をサポートする存在です。仕事の内容は各公館によって異なりますが、私の場合、会計や庶務などの通常業務に加え、ホテルの予約や用務先への同行といった公用出張者対応、各書類の翻訳、現地業者との調整や外務省員と現地職員との通訳などが主となっています。在外公館で働いていると聞くと、なんとなく華やかなイメージを持たれる方も多いと思いますが、「派遣員」が直接外交に関わることはまずなく、どちらかと言うとその華やかなイメージの「陰」にいる存在だと言えます。一方で、これまで新聞やニュースでの出来事でしかなかった外交活動を、間近に見ることができるのは非常に面白いです。政治家の方や、外務省員を始めとした各省庁の職員、現地の日本企業の方など、非常に幅広い人々と関わる機会も多く、日々いろいろなことを学ばせてもらっています。

仕事か研究か、どちらを選ぶか決められず、考える時間がほしいと思う他方でドイツとは関わっていたいという気持ちから望みをかけた派遣員試験。まだ自分がどちらに進むのか、きちんとした答えは出ていません。仕事と研究、どちらを選ぶにせよ、「ドイツ」という国を軸として生きていくことを目指して、残りの派遣員生活を謳歌したいと思いません。

(国際学部 国際社会学科 第 13 期卒業生)

(2014 年 12 月 05 日原稿受理)

海外留学今昔 14 第 35 号から国際学部出身者および在学者を中心とした海外留学体験の寄稿をお願いしたコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**海外留学経験者**および**海外留学中の在学者の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

学生サロン 09 知求会ニュース第 41 号より現役学部生によるコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**現役学部生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。今回は投稿予定者の都合により、次回に延期します。

キャリア指南 12 現役学部生に向けた企画として、宇都宮大学全学部から国際機関をはじめ、NGO・NPO や企業などで活躍する先輩方に執筆していただくコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**キャリア指南にふさわしい卒業生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

フォーラム 2014 年の師走を迎えて、皆様忙しいことと思います。(原稿集めに苦労しています。)

今回は中村祐司研究室 OB の藤田邦夫さんと田巻研究室 OG の辻紀江さんをお願いしました。

「私の終活 第一ステップ」

藤田 邦夫

国際学研究科国際社会研究専攻一期生の藤田邦夫です。私は栃木県西那須野町（現・那須塩原市）で生まれ、高校まで地元で過ごし、都内の大学に進学、都内の銀行に就職し 29 歳で都内の大学に転職しました。その後、41 歳の時に栃木県大田原市に新しい大学を作る話があり、その設置準備室の求人広告を新聞で見ると二度目の転職をし、大学開学と同時に地元に戻りました。北島滋名誉教授が「知求会ニュース第 50 号」の「国際学部設立秘話」で学部設立の苦労話を書かれています。私たちも全くゼロから新しい大学を作る仕事に携わり 1995 年 4 月に大学が開学しました。国際学部開設と同じ年です。4 年後に大学院も開設しましたが、これも国際学研究科開設と同じ年です。この間に経験した秘話、裏話は数多くありますが、別の機会に譲りたいと思います。

私は現在 63 歳です。3 年前大学を定年退職し現在は嘱託として同じ大学に勤めています。私の世代は団塊の世代の少し後で、いわゆる典型的なモーレツサラリーマン世代であり、仕事最優先で他のことは全て後回しにして生きてきました。60 歳を過ぎて少し時間にゆとりが出たことを機に、「昔巡り」を始めました。学生時代や 20 代、30 代の頃に過ごしたところ（主に東京、横浜）を巡っています。昨年は学生時代 4 年間過ごした下宿を訪ねてきました。下宿はなくなり新しい建物に変わっていましたが、当時お世話になった家主さんはご健在で、40 年以上前の話で盛り上がりました。

また、一昨年は 20 代の頃勤めていた銀行の仲間の飲み会に参加しました。一部の人は数年前からゴルフなど一緒していましたが、多くの方は三十数年振りの再会でした。ほとんどの人の顔は分かりましたが、面白いもので三十数年振りの再会でも「よっ、元気！」程度で話しは終わってしまいました。また、周辺の話に耳を傾けると、孫、病気、年金の話題で盛り上がっていました。

さらに最近、これは偶然ですが高校時代3年間同じクラスにいた友人(?)2人に立て続けに会うことができました。二人とも高校卒業以来四十数年振りの再会で、お互い顔を見合わせても全く面影すら思い出せませんでした。話しをしていくうちに間違いなくクラスメートであることが確認できました。

当然のことですが、年月が経てば建物はなくなります、人は記憶をなくします、人は死んでゆきます。建物がなくならないうちに、人が記憶をなくさないうちに、人が死なないうちに「昔巡り」を急ぎたいと思います。今の私にとって10年前は「つい最近」、20年前は「少し前」、30年以上前がやっと「昔」といった感覚です。その「昔」の場所、建物、風景、人を巡って行きたいと思います。「昔巡り」、これが私の終活第一ステップです。

(国際学研究科 国際社会研究専攻 第1期生)

(2014年11月11日原稿受理)

「社会人大学院生としての学び」

辻 紀江

今回は貴重な紙幅に、私の大学院での経験を載せていただき大変光栄に思っています。フルタイムで働く社会人大学院生として、2年間、様々なことを学びました。私の経験がこれから大学院進学を検討されている方の参考になれば幸いです。

大学院進学 of 動機

私は、栃木県内の高校を卒業後、東京都清瀬市にある日本社会事業大学社会福祉学部に進学しました。同大学は戦後まもなく設立され、社会福祉指導者を養成することを目的として、日本の社会福祉と共に歩んできた大学です。大学に集まるのは、社会福祉に熱く、情熱的な学生で、私は彼らと共に大変内容の濃い学生生活を送りました。その中で、大学1年の時に基礎ゼミナールという科目があり、私は文化人類学専門の藤本ヘレン先生の下、多文化に興味のあるゼミの仲間と、「様々な文化的背景を持った方とどう共生していくのか」、「日本における外国籍住民の生きづらさとは何なのか」、その他様々な福祉テーマについて議論をしました。結果、その時の学びが大学院進学の後押しに、そして現在の研究の核となっています。

大学卒業後は、社会福祉士、精神保健福祉士を持つソーシャルワーカーとして仕事を始めましたが、ソーシャルワーカーとして現場で働く中で、クライアントの生きづらさ、様々な生活問題に直面し、「ソーシャルワーカーの存在価値とは何なのか」と考えるようになりました。特に、クライアントやサポートするご家族が外国人であるケースでは、外国人であるが故の複雑な問題が発生しており、支援が思うように進まず、心の中にずっと引っかかっていました。次第にこの問題を明らかにしたい、私が直面しているこれらの問題を何らかの形でまとめたい、という気持ちが大きくなり、大学院進学を真剣に考えるよ

うになりました。進学にあたっては、仕事をしながらの条件であったため、様々な制約があり、社会福祉学部を専攻するか、国際化に関する研究テーマであるため国際学部を専攻するか、迷いもありました。しかし、田巻松雄先生の存在を知り、実際にお会いして、宇都宮大学大学院への進学を決意しました。

学生生活

実際に大学院が始まってみると、フルタイムの仕事をしながら2年間で単位を取得し、修士論文を書く、この大変さを痛感する毎日でした。研究テーマは「栃木県における在日外国人への医療・福祉支援の現状と課題～多文化ソーシャルワークの視点から」で、仕事での経験から、研究動機や目的はある程度はっきりしていたものの、いざ研究となるとどこからどう論じていけば良いのか、頭を悩ませることばかりでした。もちろん単位取得のために授業の出席・課題にも取り組むため、仕事以外のすべての時間を課題や研究に費やし、往復2時間の道のりで何度も眠気に誘われ日々・まさしく、「すべての時間を勉強に費やした！」日々でした。

多忙でしたが、新しいことに挑戦し、自分が今まであいまいだったことへの理解を深められたことで、仕事とは違った充実感を得ることができました。また、幾度となく抱いた不安や焦りを乗り越えられたことで、自分の忍耐強さを再認識することもできました。また、指導教員である田巻先生、副指導教員である友松先生には未熟な論文を根気強くご指導いただき感謝しています。共に学んだ留学生や社会人学生と出会えたこと、先生方から頂いた様々な知識やアドバイスは、2年間のもっともすばらしい収穫となりました。

一点後悔していることは長期履修で4年かけて多くの講義を受講し、ゆっくりじっくり修士論文に取り組む選択をしなかったことです。もし、今後博士後期課程で学ぶ機会があれば、その時にはこの反省を生かしてじっくり研究に取り組みたいと思います。

最後に

大変急ぎ足で大学院生活を終え、ホッとしたのも束の間、4月からはまた仕事に追われる日々を送っています。この仕事から研究テーマが生まれ、それをまとめられたことで、仕事をしていく上での軸が定まったような、芯が通ったような気がしています。最後に、この場を借りて大学院進学をサポートしてくださった上司、大学院での学びを支えてくれた家族に感謝を伝えたいと思います。

(国際学研究科 国際交流研究専攻 第9期生)

(2014年12月10日原稿受理)

特別寄稿

第3回ホームカミングデーが無事終了しました。その報告を吉葉恭行・国際学部同窓会長にお願いしました。なお、データの容量の関係で、PDF化した原稿を別便にて配信します。

併せて、懇親会で同窓会会長挨拶が予定されていましたが声がかかりませんでしたので、誌上にてお披露目させていただきます。

国際学部同窓会編

別便の PDF をご覧ください。

(2014年12月22日原稿受理)

大学院国際学研究科同窓会編 (文責 土屋伸夫)

みなさん、こんにちは！

いま、ご紹介に預かりました通称・知求会の大学院国際学研究科同窓会、および知求会ニュース編集長の土屋です。

国際学部創立20周年ころから知求会を代表してお祝い申し上げます。田巻現学部長をはじめ、歴代の学部長の先生方、教員・事務職員の方々のご苦勞に感謝いたします。

さて、20周年といえば、人間にたとえてもやっと成人という段階です。今後の10年が重要なときです。今回は遠方からの修了生・卒業生も参加されています。

新聞を見ますと、大学の環境は「国際の関係学部」があいついで設立されている激戦の状況になりつつあるようです。ある私立大学では、著名な大学の学部長を引き抜いたようです。私たち修了生および卒業生が実務現場において、また社会貢献・地域貢献も含めて活躍することが、さらに重要になってくるでしょう。

最近、グアムの修了生からメールが届きました。大学院を修了してから語学留学後、現地に在住して天職となった公立高校の日本語教師として活躍しています。いま、グアム日本語教師会のプレジデントを務めているようです。ますます、世界にちらばっている修了生・卒業生の活躍が期待されます。

大学院同窓会の知求会は大きな課題を抱えています。さらなるネットワークの強化が重要と考えています。このところ、修了生へのメールが届きにくくなっています。つまり、メールアドレスの変更によるものです。

この会場にいます修了生で「知求会ニュース」が届いていない方がいましたら、私まで一声おかけください。

最後になりましたが、この懇親会が大学側と修了生、卒業生のさらなる絆となること、そしてよき情報の循環がうまれることを願ってあいさつのことばとします。

EU 支部だより

第 38 号からイタリア在住の松原真実子さんによる知求会 EU 支部だより「Newsreel World」を発行してきました。今回の 12 号の内容は、1 イタリアと日本 噴火について共同研究 2 EU 支部だより ホームカミングデーです。配信方法は、画像が掲載されているために別便で配信します。ファイル容量が大きいことで、ニュースレターが受信できない場合にはその状況をお知らせください。

編集者のひとりごと

●今回は例年の 12 月 15 日配信予定が大幅に遅れました。その理由は、12 月 13 日に開催された HANDS プロジェクトの「外国につながるフォーラム 2014」を掲載しようと考えたためでした。結果は編集者の力量のなさにより、次回掲載となりました。皆様には配信が遅延したことにより、大変ご迷惑をお掛けしたことを誌上にてお詫び申し上げます。

今号は「研究室訪問」、「海外留学今昔」、「学生サロン」、「キャリア指南」コーナーなどが掲載できず大変残念です。思うように投稿者を選出し、入稿に至るまでの経過が一筋縄ではいきません。皆様におかれましては、なにとぞご了承のほどお願い申し上げます。

今年は災害が多く心が痛んだ年でした。ただ、年末には明るいニュースとして、ノーベル物理学賞の受賞がありました。赤崎勇・名城大学終身教授 / 天野浩・名古屋大学教授 / 中村修二・米カリフォルニア大学サンタバーバラ校教授の 3 名の受賞は本当に明るく、また研究者にとっても感銘深いものでした。皆様はどう思われましたか。

さて、知求会ニュースも、無事 13 年目を配信することができました。これまでの原稿執筆者の皆様、本当にありがとうございます。Season's Greetings! 皆様、よいお年をお迎え下さい。

編集後記：2010 年 4 月 26 日から 知求会ニュースのバックナンバーは 国際学部同窓会 HP (<http://www.afis.jp>) で見られるようになっていきます。

同窓会会員の皆様へのお願い：住所、勤務先および携帯電話番号、メールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。 chikyukai@freeml.com

ホームカミングデー（国際学部創立 20 周年記念）に参加して

11月22日（土）に開催されたホームカミングデーは盛況のうちに終了しました。今回は国際学部創立20周年の記念行事も兼ねたものとして盛大に開催しようと昨年より田巻学部長と打ち合わせを重ねてきたこともあり、印象深いイベントの一つとなりました。

私は、1995年4月に第1期生として入学しましたが、その頃のことは今も鮮明に思い出され国際学部創立から20年が経過したという事実を受け止められませんでした。しかしながら、今回のホームカミングデーでの歴代学部長（鯨井・藤田・北島・岡田・内山先生が出席された）の講話を拝聴し、久しく会わなかった同窓生に会い、やはりわれわれ同窓生もそれぞれの20年間を過ごしてきたのだと実感されました。歴代の学部長の講話は、国際学部創立期のお話や各先生方が学部長として学部の運営を担った時期のエピソード、そして今後の国際学部に対する期待など、多岐におよびましたが、いずれも現国際学部へエールを送っているように思われました。同窓生もいつもより多く集まり、在学時にはお会いできなかった年代の離れた同窓生と情報交換することもできました。

なお、ホームカミングデー終了後は、各同窓生は研究室単位で2次会へ流れていったことは言うまでもありません。ちなみに私の所属した藤田ゼミは北島ゼミとの合同開催でした。今回参加されなかった同窓生は、次回（2016年11月開催予定）の参加を検討されてはいかがでしょうか。同窓生の厚みが徐々に増してきましたよ。

下に「国際学部同窓会のあゆみ」を掲載します。ご参照ください。 国際学部同窓会会長 吉葉恭行

国際学部同窓会の歩み

1994（平成6）年 同窓会設立準備委員会発足
同窓会設立準備作業にとりかかる

1995（平成7）年4月 国際学部第1期生入学

1999（平成11）年

3月24日 学位記授与式、第1回目の卒業記念パーティー開催

卒業記念パーティーにて同窓会設立総会が開催され、国際学部同窓会が正式に発足する。

4月12日 ガイダンスにて同窓会案内、入学祝賀パーティー開催共催

7月2日 国際学部修士課程設置記念式典出席

9月17日 大学創立50周年記念式典の共催

2000（平成12）年

3月24日 学位記授与式出席

4月10日 国際学部新入生ガイダンスにて同窓会の案内、歓迎パーティー出席

11月 仮事務局を国際学部内に設置

2001（平成13）年

3月23日 学位記授与式出席

4月12日 ガイダンスにて同窓会案内、入学祝賀パーティー開催共催

6月2日 第1回定期総会開催（学生会館2F トークルーム）

2002（平成14）年

3月26日 学位記授与式出席

11月 同窓会仮事務所を国際学部内に設置

2003（平成15）年

3月25日 学位記授与式出席

4月12日 ガイダンスにて同窓会案内

5月22日 各学部等同窓会連絡協議会出席

6月4日 留学生後援会への賛助

6月22日 第2回定期総会開催（共通教育B棟）

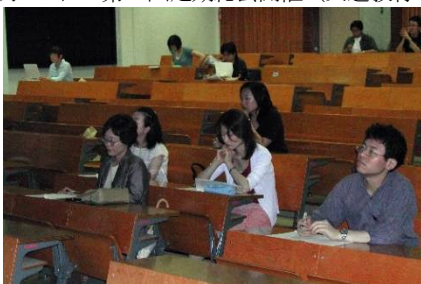


写真1 第2回定期総会（2003年6月22日）

12月1日 独自ドメイン（afis.jp）によるwebサイト開設

2004（平成16）年

1月19日 各学部等同窓会連絡協議会出席

3月24日 学位記授与式出席、卒業記念パーティー出席

4月7日 入学式出席

8月21日 各学部等同窓会連絡協議会出席

9月25日～27日 2004国際キャリア・合宿セミナーキャリア支援事業後援

12月11日 各学部等同窓会連絡協議会出席

2005（平成17）年

2月2日 同窓会事務局国際学部A棟に設置

2月5日 各学部等同窓会連絡協議会出席

3月24日 学位記授与式出席、卒業記念パーティー共催

4月8日 入学式出席

6月18日 各学部等同窓会連絡協議会出席

7月23日 宇都宮大学キャリアフェスティバル後援

7月23日 第3回定期総会開催

（ホテルサンシャイン2F中ホール）



写真2 第3回定期総会懇親会（2005年7月23日）

8月28日 留学生後援会への寄付

11月21日 ユネスコ学生交流プログラム参加学生ボランティア支援

2006（平成18）年

3月24日 学位記授与式出席、卒業記念パーティー共催

4月7日 入学式出席

8月3日 国際学部交流会 Friend in Ship 2006 への支援

2007 (平成 19) 年

- 3月23日 学位記授与式出席、卒業記念パーティー共催
- 4月9日 入学式出席
- 4月11日 新入生ガイダンスにて同窓会案内
- 5月12日 各学部等同窓会連絡協議会出席
- 11月17日 15:00~16:00 第4回定期総会開催
・通称ポルトガル語寄付講座支援決定
・国立大学法人宇都宮大学「峰が丘地域貢献ファンド」への拠出決定

2008 (平成 20) 年

- 2月16日 各学部等同窓会連絡協議会出席



写真3 各学部同窓会等連絡協議会 (2008年2月16日)

- 3月25日 学位記授与式出席、卒業記念パーティー共催
- 3月28日 国際学研究科外部評価委員会出席
- 4月8日 入学式
- 4月9日 新入生ガイダンスにて同窓会の案内
- 9月6日 各学部等同窓会連絡協議会出席

2009 (平成 21) 年

- 2月14日 国際学部長との懇談会開催、理事会開催、各学部等同窓会連絡協議会出席
- 3月17日 旧講堂改修記念祝賀会
- 3月24日 学位記授与式出席、卒業記念パーティー共催
- 4月8日 入学式
- 4月10日 新入生ガイダンスにて同窓会案内
- 7月11日 各学部等同窓会連絡協議会出席
- 9月5日 第5回定期総会開催(宇都宮大学学生会館2F トークルームII)
- 11月22日 宇都宮大学創立60周年記念式典共催

2010 (平成 22) 年

- 2月12日 ホームカミングデー実行委員会出席
- 2月12日 各学部等同窓会連絡協議会出席
- 3月24日 学位記授与式出席、卒業記念パーティー出席
- 4月8日 入学式出席、ホームカミングデー実行委員会出席
- 4月9日 新入生ガイダンスにて同窓会案内
- 4月29日 第1回ホームカミングデー協賛



写真4 第1回ホームカミングデー (2010年4月29日)

- 7月5日 ホームカミングデー実行委員会出席

2011 (平成 23) 年

- 1月17日 同窓会東京支部懇談会開催(北島名誉教授を囲んで)
- 2月10日 各学部等同窓会連絡協議会出席
- 3月24日 学位記授与式(東日本大震災のため中止)
- 4月7日 入学式(東日本大震災のため開催せず)
- 11月8日 各学部等同窓会連絡協議会出席
- 11月19日 第6回定期総会開催(国際学部A棟3F共同研究室)

2012 (平成 24) 年

- 3月8日 各学部等同窓会連絡協議会出席
- 3月22日 学位記授与式出席、卒業記念パーティー共催
- 4月9日 入学式出席
- 11月27日 第2回ホームカミングデー協賛

2013 (平成 25) 年

- 2月27日 各学部等同窓会連絡協議会
- 3月25日 学位記授与式出席
- 4月6日 入学式出席
- 9月14日 第7回定期総会開催(学生会館2F トークルームII)

2014 (平成 26) 年

- 2月1日 同窓会東京支部懇親会開催(北島名誉教授・田巻学部長・佐々木一隆先生・中村真先生を囲んで)



写真5 東京支部懇親会 (2014年2月1日)

- 3月24日 学位記授与式・卒業論文優秀賞同窓会長賞の授与

- 4月5日 入学式出席



写真6 学位記授与式での祝辞 (2014年3月24日)

「国際学部同窓会のあゆみ」は『国際学部創立20周年記念誌』に掲載されたものを転載しました。